

少女マンガとアメリカとわたし

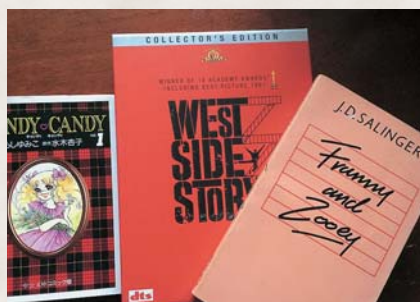
文学部英米文学専攻 教授 大串尚代 おおぐし ひさよ

大学受験を考えるようになった高校生の頃にはすでに、漠然と「アメリカ文学を学ぼう」と思っていた。そのときわたしの念頭にあったのは、J・D・サリンジャーだった——結局、学部ではポール・ボウルズという作家で卒論を書くことになったのだが。

あるとき、ふと「わたしがアメリカについて関心を持ったのは、いつからだったのか」と考えてみたことがある。わたしは記憶をたどってみた。サリンジャーを読んでいたときには、アメリカ文化についての本——たとえばニューヨークでソーニャル・ワーカーとして働く日本人の手記だとか——も読んでいたはずだ。中学生時代には、『ロードショー』や『スクリーン』などの映画雑誌を購読し、ハリウッド映画に親しんでいたが、それは小学校6年生のときに父親と一緒にリバイバル映画館で見た『ウエスト・サイド物語』がきっかけだった——ような気がする。これか。

このことを思い出してからしばらくの間、わたしは「アメリカに興味を持ったきっかけ」を尋ねられると『ウエスト・サイド物語』をあげていた。しかし、小学生のときから、地元や学校の図書館でも、アメリカ文学に親しんでいたではないか。エドガー・アラン・ポーの探偵小説、ルイザ・メイ・オルコットの『若草物語』、フランシス・バーネット（正確には英国生まれで米国に移住した作家だが）の『小公子』『秘密の花園』など。こうした児童文学の影響だったのだろうか？

そしてわたしはついに思い至ったのであった。わたしがアメリカ——あるいはほんやりとした外国——のイメージを持つようになったのは、日本の少女マンガを読んでいたからだだったということ。それは他でもない、わたしが物心ついた頃、大変な人気を誇っていた『キャンディ・キャンディ』（水木杏子原作、いがらしゆみこ画）である。シカゴという地名も、孤児院の存在や、戦争によって異国で命を落とす人がいるということも、このマンガで初めて知った。きっかけなど、ささいなことかもしれない。しかし、わたしは今でも、この作品には感謝しているのだった。



「アメリカ」を知るきっかけを与えてくれた作品たち

談話室

教員によるエッセイコーナー